

デング熱豆知識

東京医科大学病院 渡航者医療センター

■ どんな病気なのか

デングウイルスの感染によって起こる熱病で、蚊がこのウイルスを媒介します。現在、日本国内でデング熱の流行はありませんが、アジア、中東、アフリカ、中南米などでは年間 1 億人近くの患者が発生しており、約 25 万人以上の重症者がでています。流行する時期は蚊の繁殖する雨季に多いとされています。

日本国内でも海外で感染した人が毎年 100 人前後発病しており、2010 年は 245 人に達しました。2007 年 -2010 年の日本人患者の渡航先としては、東南アジアを中心としたアジア諸国が 9 割を占め、とくにインドネシア、インド、フィリピン、タイでの感染事例が多く報告されました。

■ 症状

感染後 3～7 日経過してから、発熱（38.0℃以上）、頭痛、筋肉痛や関節痛といったインフルエンザ様の症状がでます。また、発熱して 3～4 日後から胸やお腹に赤色の小さな発疹が出て、次第に手足や顔面に広がります。検査としては血液の抗体検査や抗原検査などを行います。

通常は発熱してから 1 週間ほどすると回復します。しかし、この時期に一部の人は、歯ぐきの出血や血便や血尿といった「出血症状」、さらには「ショック症状」をおこし、重症化することがあります（デング出血熱）。重症化した場合の致死率は 1%前後とされていますが、日本人の患者で命にかかわる状態になることは大変に少ないようです。

■ 予防

デング熱には有効なワクチンがありません。このため、予防には媒介する蚊の対策が重要です。デング熱を媒介する蚊（ネッタイシマカ）は、郊外だけでなく都市やリゾートにも出没します。この蚊は昼間吸血する習性があり、とくに日の出後と日没前は注意が必要です。蚊に刺されないようにするためには、肌を露出しない服装（長袖・長ズボンを着用）をすることともに、虫よけ軟膏やスプレー、蚊取り線香などを用いましょう。



■ 治療

デング熱にきく特効薬はありません。熱に対しては副作用の少ない解熱剤を使用したり、失われた水分を点滴で補給したりします。大事なことは、デング熱にかかった場合、短期間のうちに重症化することがあるので、早めに医療機関を受診することです。自己判断で市販の解熱剤（とくにアスピリン系）を使用すると、かえって出血症状のリスクを高めることがあり危険です。なお、病状によっては入院して治療が必要になることもあります。

デング熱クイズ

Quiz

デング熱に関するクイズです。「はい」か「いいえ」でお答えください。

質問	正解	解説
1 蚊に刺されて感染する	はい	ネッタイシマカなどに媒介されます。
2 ウイルスが原因である	はい	デングウイルスが原因です。
3 日本国内でも流行している	いいえ	現時点で日本国内での流行はありません。
4 東南アジアでも都市部は安全だ	いいえ	東南アジアの都市でも感染する可能性があります。
5 症状として熱や発疹がみられる	はい	38℃以上の発熱や、頭痛、関節痛、発疹などが主な症状です。
6 命にかかわる病気ではない	いいえ	重症化してデング出血熱になると、命にかかります。
7 ワクチンで予防できる	いいえ	現在、有効なワクチンはありません。
8 昼間、蚊に刺されないよう注意すれば予防できる	はい	媒介する蚊は昼間刺すので、それを防げば予防できます。
9 発病したら市販の解熱薬を服用する	いいえ	解熱薬によっては出血症状が強まる場合があります。
10 特効薬はない	はい	特効薬がないため、安静、水分補給、対症療法が治療法です。



この冊子に関するお問い合わせやご意見は下記までお寄せください。

東京医科大学病院・渡航者医療センター

〒160-0023 東京都新宿区西新宿 6-7-1

FAX : 03-3347-5561

E-mail : travel@tokyo-med.ac.jp

URL : <http://hospinfo.tokyo-med.ac.jp/shinryo/tokou/>